共同観測のすすめ

箕輪敏行

今から１１年前（１９６８）ソ連日食に際しわが国最初のアマチュア日食観測団が結成されたときの話である。なにしろはじめてのこととて何をどうしてよいか、観測のあり方はどうか、手順はどうか、などいろいろ論議された中で当然共同観測の話が持上った。同じ望遠鏡を何本ももってゆくより共同してより大きいものをもっていこうという意見のでたなかで、私自身は、"自分がお金をだし、自分の望遠鏡をもってゆき、自分でシャッターを切り、これが俺がうつした黒い太陽だ"という自己満足するところに観測の意義があるのだ。共同で人のとったものなど……といった具合で私は共同観測に終始反対した１人である。にもかかわらず９月２２日観測当日計画の推進者の一人である木村精二氏は黙々として而も声高らかに自己の観測は犠牲にしてもっぱら時計の秒読みに終始された姿は観測者を自認している自分にとって生涯忘れることの出来ない一駒であろう。 ― それから１０年たった、共同観測に反対した私が今ここに共同観測のススメをかくというのは悪くいえば転向であるし、よくいえば脱皮であろう。はじめて海外日食に参加される方の心情は恐らく最初に私がのべた心情と同じであろう。しかしアマが海外にでてより10年を越え、10周年記念会も一昨年川崎で行われた現時点において１０年１日の如く"美しいコロナ"が撮れたと美的自己満足ばかりしてもいられない、もう少し前進してもよいのではなかろうか。

- めったにみられないコロナを撮りみて楽しんで帰る
- 自分のデーターが多少なりとも学問的に役立つ
- 積極的に高次な結果をもとめて組織的チームをつくる

大まかに考えてみると上記のような考え方があるだろうし、それぞれ意識のあることではあるが少くとも何度も日食に参加した方は第３の方向に進むのがアマ観測者としては望ましいのではなかろうか。今ここで第３についての問題点を考えてみたい。

- 秦先生によれば今回の日食はアフリカ、インド間の経過時間は約１００分ある、この時間内に両地点で同一器械、同一方法で写真をとれば短時間におけるコロナ変化の様相がわかる。（今迄世界で殆ど試みたことがない）
- 両者観測の人員は１地点３名あれば出来る、器械の運搬、観測の分担
- ３人は共同して器械を持参し１人がこの計画にそったモノクロ写真をとり、他は秒よみやその他観測協力しながら手軽な方法でカラーなど自分の写真をとる余ゆうは充分ある。
- 観測結果は３名の共同名儀とし写真などは平等にわけあう。
- データーのまとめ処理は両地点の共同観測者が合同して行えばよいが、それが出来なければ学生や研究者に委託する。日食に参加しない方でもこの処理について共同参加してもらうという参加方法もある。
- 同一コースをとる観測仲間でたとえば赤道儀のバランスだけをもってあげますというのもこの共同観測への一つの参加方法である。

東京理科大学観測隊では両者にわかれてこの二点程観測をやるという。さすがに伝統のある観測隊である。私共も終始共同二点観測を機会ある毎によびかけてきた。にもかかわらずいうこと易し行うこと難しか、結局現在、川天の、森久保、佐藤、山口、川村、箕輪の５人しかまとまっていない。今回の日食観測に出かける人は何百人という数となろう。それらの人々が大部分は美しいコロナの魅力にとりつかれ満足されることであろう。しかしそんなに多い数の方からわずか６人のペアがた易くくめないというのは残念なことである。我々の二点わかれる計画はおそまき乍らやっと出発した段階であるので観測計画もニューカークフィルターにするか、連続撮影にするかまだにつまっていないがなんとか成功させたいと思っている。いや成功しなくてもやってみれば気がすむというものである。大方の御協力と御参加をお願いしたい。私も八丈日食以来、数回の日食を経験した。最初の自己満足の観測から共同観測のススメに至る迄の心情の変化の歴史を理解していただければ幸である。

７９年９月３０日の日本アマチュア天文研究発表大会より

日食・月食分科会

座長　山口正博

１９８０年２月のアフリカ・インド日食が唯一の議題となった。

討議項目

１９８０年２月のアフリカ・インド日食の概況の説明

各旅行グループの旅行計画の概要

天文台関係の観測計画についての説明

ＮＨＫの取材計画について紹介

理科大学天文研究部のインド・アフリカ二点観測についての説明

二点観測、共同観測についての提案

各グループのリーダー会議の提案

日食研究会の復活と再興について

６０～７０名の出席者を得て、アフリカ・インドの話題に集中した。過去１０年以上の海外日食観測の中で、今回は最大の規模が予想される。年々規模が大きくなりつつある割には、観測者間の連絡や、共同観測、協力体制が生まれなかった。日食観測の各グループを横につなげる連絡委員会やリーダー会議の動きが今後期待される。　（記録　足立潔史）